

Society 5.0、IoT、AI等の時代に生きる子供たちは、身に付けた力で自分や社会を拓くことが期待されている。そのためには学習において知識理解の獲得にとどまらず、考えること、すなわち「問い」を持つことが重視されている。今、教師は知識を一方的に教え込むことから脱皮し、子供が学習問題・課題を「自分事」にして問いを持ち、問いを深めるように導くことに苦労している。どのようにすれば良い問いを持ち、学びを自分事にするのか。その答えを期待して手にしたのが本書である。

### 問いの立て方



宮野公樹 著  
858円 ちくま新書  
☎03-5687-2680

のつけから跳ね返された。著者は「ノウハウめいた方法論や読後直ちに使えるようなもの、それを書こうとした本ではない」と言う。「『いい問いの立て方』をどのように考えていくのか。それは何なのか」と問い、「しっかりと静かに自分と向き合い」読むことを期待される。ついでい

けるか、不安の中で読み進める。「『いい問い』とは何か、「『いい問い』にする方法、「『いい問い』の見つけ方」と読み進めた結果、詰まるところは自分の在り方、対象の見方・考え方を捉え直すことが必要のようだと思に至った。



著者は「『いい問い』の見つけ方の視点として「違和感」を挙げている、自己と対象の間の差異＝違和感を持つとはどういうことか、一緒に考えてみよう。これが、子供の学びを自分事にしていく学習指導の出発点となる期待できる。

学ぶことは「自分づくり」でもある。教師自身が与えられたことを教えるという立場・意識から脱却し、自己と対象について考え、問うことの意義を考えるいい機会となるのではないか（教育調査研究所・寺崎千秋）

SNSなどのWeb空間の中に存在している。この状況で、若者は「リアルな場所」に何を求めているのか。これが本書の問いである。調査の結果、社会・経済的な状況については、(DIID人口密度による)「都市度」の上昇に伴って線形的に変容することはない、下位25%と残りの75%の間での「段差」と上位25%と下位25%が最も突出した傾向を示すような傾向が見られた。「地域」や「地元」に関する項目については、どの地域でもある程度は類似した回答傾向が得られた。

### 場所から問う若者文化 ポストアーバン化時代の若者論



木村絵里子・響田竜蔵・牧野智和 編著  
2640円 晃洋書房  
☎075-312-0788

本書は、次のように言う。プラットフォーム化はますます優勢になる一方、それと対抗的に「場所」や「都市」

都市空間は人とモノと情報を集約させるメディアとしての機能を備えていたが、現在、そのかなりの部分がSNSなどのWeb空間の中に存在している。この状況で、若者は「リアルな場所」に何を求めているのか。これが本書の問いである。調査の結果、社会・経済的な状況については、(DIID人口密度による)「都市度」の上昇に伴って線形的に変容することはない、下位25%と残りの75%の間での「段差」と上位25%と下位25%が最も突出した傾向を示すような傾向が見られた。「地域」や「地元」に関する項目については、どの地域でもある程度は類似した回答傾向が得られた。

本書は、次のように言う。プラットフォーム化はますます優勢になる一方、それと対抗的に「場所」や「都市」にこだわる若者文化も根強く残るだろう。そのため、オンライン空間とオフライン空間、地元志向と都心志向、移動性の高い者とそうでない者との間で、文化的分断が進む可能性もある。それゆえに、それぞれの地域において、こうした分断を乗り越え、ハブとなる「場所」をいかに創造的に機能させていくのかという観点が重要である。都心部に近い「若者の集まる街」が活気を失うことがあっても、若者がリアルな場所での「出会い」、「つながる」こと自体を望まなくなったりしてはならないと本書は言う。

評者は考える。教員が、バーチャルな「場所」を肯定するとしても、今の生徒とはズレがあることを理解しておくべきだろう。その上で、「出会い」、「つながる」ためのWeb空間や地域の作り手としての生徒の視野拡大を図り、新しい価値を共に創造したい。（前聖徳大学教授・西村美東士）